

無想録 十八 年の暮

例年のごとく報恩講がすんだ。和尚や、正覚法印や、吉村好勝氏や、それに幡谷先生も一晩見える。その他各地の同胞も来て、なつかしい営みであった。私は涅槃経の序品と純陀品とを語った。

涅槃経は釈尊最後の説法であり、報恩講は聖人九十年の生涯をしのぶ法会である。その中に一脈のあるものが通ずる。寂の味がそれである。

報恩講がすむと、あわただしく今年も暮れてゆく。ものの終りは人を内省へ内省へとつれてゆく。

年の終り、終りにあらず、年の始め、始めではない。始めというも終りというも人の世のありようにすぎない。天地もとより始終なく、人生にあわただしく生死あり。生死に徹し、始終を生かす者のみ、生死、始終を超えて生きてゆく。

一年間をふりかえる。後悔はなきか。古の聖賢は日々三度わが身を顧みるという。年末にあたつて、一ヶ年を清算し、来年の覚悟を定めることは大切なことである。

十一月二十五日、萩市の史蹟を巡拝して、吉田松陰先生を祭れる松陰神社に参詣する。名は県社であるけれども、なんとお粗末な宮であることよ。境内には松下村塾がある。十畳半と八畳の粗末な二間である。やがて先生幽囚の室のある杉家を訪らう。ここにある三畳半の一室こそ、先生が学び、書き、公憤せられた部屋である。書を講し読しつつ門弟とともに米をつかれた臼がそのままに保存せられてある。

やがて先生の誕生地杉家旧宅の跡を弔う。ここよりは、柑橘多き萩市は一目の間におさまる。後に護国山を負い、彼方海辺に指月山しづきを見る。ああ、先生はここに誕生し給いしか。やがて杉家、吉田家等の墓所に参詣し、松陰先生の墓前合掌久しくす。門弟、久坂、高杉等の墓もここにあり、しかもこの質素なる墓を見よ。一代の英傑の墓標は、一上等兵の墓碑よりも劣る。

多年の心願はとどいて今日松陰先生の遺蹟を目のあたり拝す。感慨無量。

田中義一大将の堂々たる銅像あり、伊藤公の粗末な銅像あり、しかして松陰のそれなし。先生は従一位にあらず、大勲位にあらず、公爵にあらず、されどこの萩における先生の重々しさよ。

明治の元勳伊藤、山県、品川、山田等の方々が、爛漫たる春の花であるならば、先生は雪まだ深き冬の底に動く力である。因である。ああ、偉大なる因位よ。

「我今国のために死す。死して君親にそむかず、悠々たり天地の事、鑑賞明神にあり。」

「かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂。」

「親思ふ心にまさる親心、今日のおとづれ何と聞くらん。」

「身はたとひ武蔵の野辺にくちぬとも、とどめおかまし大和魂。」

この心境を解せずして、志士ありや、英傑ありや。

堂々たる無生命の殿堂、天下に充つ、しかしてこの殿堂の中より百年に一人の人物出でたりや。ああ。松下村塾は十八畳半のみ。

「最高学府？」を出でたる人、天下に充つ。学あり、才あり、弁舌あり、健康あり、しかして一体何ものを欠ぎたるか。

安政五年先生二十九歳、父兄に対する訣別の書（先生常用の硯とともに松陰神社の御神体となれる書）の中に曰く

「神州の正気、既に邪気の消蝕する所となれるか。頑児一念ここに至る。食咽を下らず。寢蓐に安んぜず。」と。

国家の前途を思うて眠られぬと言ひ、食咽を下らずと言ふ。偉人は公憤す。

松陰先生の塾には左の訓條が掲げてあつた。

「万巻の書を読むにあらざるよりは、千秋の人となることを得ん。一己の労を軽んずるにあらざるよりは、寧んぞ兆民の安を致すことを得ん。」

万巻の書を読まねば名の残るような人物にはなれない。自己の努を問題にするような人物が万民を安らかにすることはできないといふのである。

勉学だ。精進だ。努力だ。捨身だ。人生はただそれだけだ。

先生は酒を飲まなかつた。煙草をすわなかつた。また深く書生を誠めて囲碁将棋を禁じた。また書画骨董の楽しみがなかつた。

これおそらく一事に専心努力せしめんがためであろう。将来なすあらんとする人の考うべきことである。

年末も努力、年始も精進、これのみわれに与えられたる喜びであり、大道であり、宗教である。

本部建設費が七百円集まつた。申し込みだけで送金がないのを合すると約一千円である。

堂々たる寄付募集をせず、喜捨名を発表せず、心からの浄財を求めた私は、この一千円に対して、深い深い感謝と、懺愧とを感じた。

尊い献供であるから感謝を禁じ得ない。ある意味での私の自己清算であり、人格の評価であるから懺愧するのである。

米子支部の十月大会は西念寺で開かれた。もと谷大教授、ながたにがんゆう 龍含雄師の寺である。師の父上を経丸師と言つた。本山の教学部長や、事務総長などまでせられた、有名な学者であり、人才であり、信仰家であつた。四十歳ごろ、西念寺に帰られ、門外不出を誓つて、毎朝の説教をはじめられた。暗いころから半鐘が鳴る。初めは寺内の人だ

けが聞いていられたが、一人増し、三人増え、ついに数年後にはあの無教地の米子で五十人の集まりがあるようになった。叱られたことのない含雄師も「今朝のような鐘の打ち方で人の心にひびくか。」とこれだけはきびしかつたとのこと。この五十人は真に生まれた五十人である。

そのころ、境から柳楽源七なぎらという人が、毎月定例の日に米子まで来て、夜席と朝席とを聞いて帰ってゆくことを続けていた。それから後のことである。源七氏は、自分の店を息子に譲ってしまい、あらためてその店の番頭にしてもらった。そして毎月七十円の月給をそのまま貯蓄していった。不況になつても息子もその金を取ろうともしせず、その金が大分たまつた時、源七氏は寺を建てることを発表して、心ある人の喜捨を求めた。そしてできたのが、西念寺の出張所、境の真光寺である。もちろん経丸師が亡くなられてからのことである。

この話を思い出した私はお恥ずかしくてならない。

本年中、いな三十八年間、私をお助け下さった尊い方々のことを思いつづけると、心全体にこみ上げてくるものを感じる。ただ大法を限りなく自他の上に生かすことによつてこのご恩に報いたい。